

やぶにらみヨーロッパ遠航記

平 間 洋

海将補、一位二佐合わせて二〇名になんなんとする練習艦隊司令部に最後任幹部として着任、寝るに部屋なく、事務所机なし、食事は三卓、三回目、風呂も最後で十二時過ぎ、膝までしかない湯船の中に一日の疲れを癒す四カ月半の遠洋航海。

仕事は雑用全般、四十五度を越す艦内で全身あせもに悩まされながら、喰いもしない料理、飲みもしないカクテルの美味しかったこと、見もしない名所旧蹟の美しかったことを称える礼状を書く。

入港すれば、肩から繩などがぶら下げて、刀を引きずり、自動車のドアを開けたり閉めたり。

ロンドン、パリ、ベルリンと人の行けないところも見たが、連絡だノ調整だノ変更だノと暇なく駆けめぐる。行くことは行ったが、自由な時間は各地平均四〜五時間、

その俺にヨーロッパについて書けという。編集部も編集部だが、書く奴も書く奴、しかしこれも許されよう。

国防のABCも知らぬ奴が、国防無用論を唱え、基地反対を叫ぶ、それが認められる日本だから。

一、世界に通ずる日本語

(一)ところはポルトサイド、スエズ運河入口の港、いつのまにか土産売りの小船が艦尾に群がり寄ってきた。

土人「ヤスイ、ヤスイ」を連発

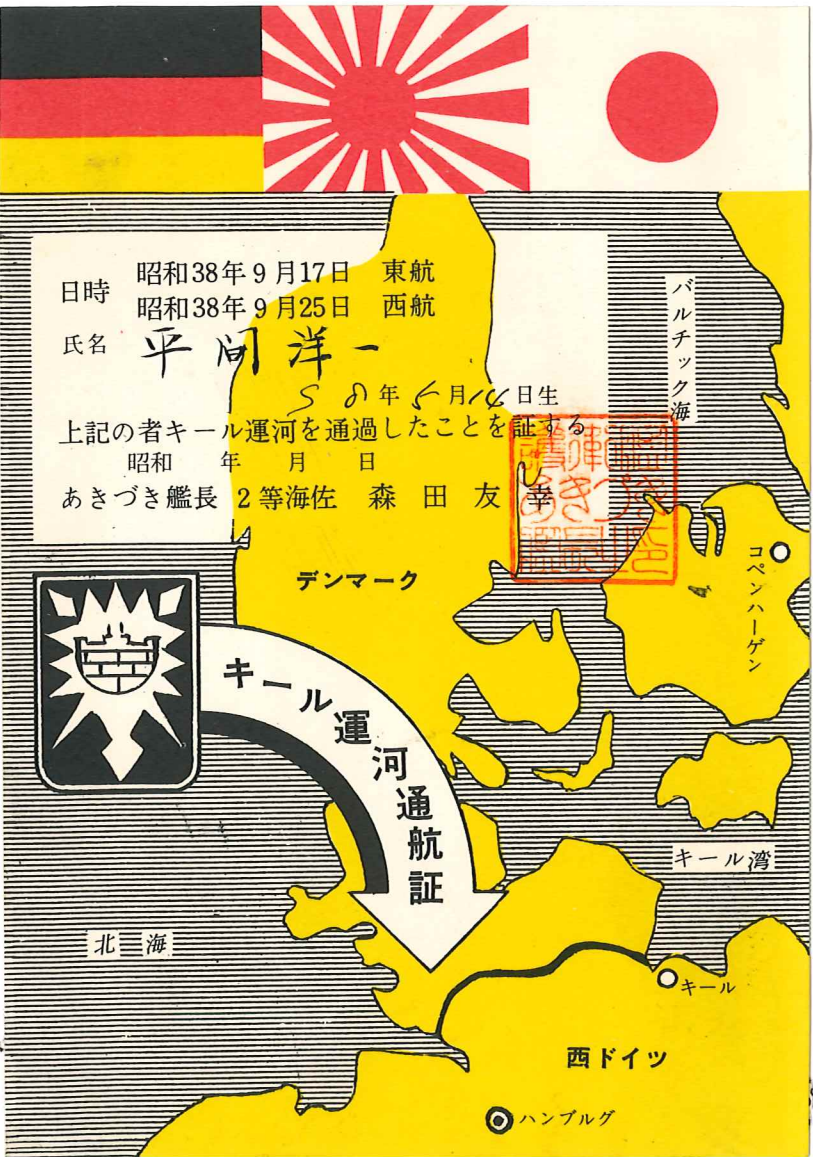
水兵「高い、高い」の野次

土人「タカクナイ、タカクナイ」と応戦

それでも約半時間後に五ドルを二ドルまで負けさせた。

水兵が金を渡そうとした時、後から手を押えた者がある。

シップチャンドラー(艦船への食糧、生糧品補給業者)ハ



るが。その所長の水産庁の技官は「日本人に比べ勤勉でない。これはヤシの木三本、バナナ一本で親子三人喰っていきける」という現地の生活程度の低さにもよるが、海を恐れ、一日も海上にいと仕事も手につかず、何もこんなに働かなくとも良いではないかと言いつつ始末」タミール・シンハリ族という二つの宗教、言語を異にする民族の対立、指導もなかなか大変なようだ。

このほか民間技術者がダム設計、製氷、電球作製に従事しているが、バンダラナイケの儲かるものは国有化の後進国的社会主義、植民地独特の不正直、不動産労働者相手に、これはアラブ、ヤラヤ等旧植民地全般についていえるが、現地の日本人の労苦には計り知れぬものがある。

「セイロンの現状をよく見てください。淋しい、情けないという気持ちを抱くでしょう。しかしこれがアジアの現状なんです。若い幹部実習生の皆さんは、このアジア的ともいえるべき宿命的貧困、植民地特有の人間不信からどうしたら解放できるか、セイロン人になったつもりで考えてみてください」と言った大使の言葉の中にセイロンを愛し、アジアを愛し、その発展に情熱をそそぐ在留邦人の熱意と、誠意を感じた。

(三) バンコック、在タイ五十年になるといふ古沢氏が「タイ国は、属国になったことのない国で国民はおおらか、対人関係を非常に重くみず。近頃の商店の人達は駐在二三年で次々に転勤、根を下ろすという気持ちがだんだん薄れていく

(四) カイロには大使館員、商社等の家族を含め約三百人の邦人がいる。

このエジプト最大の感激はやはりスエズ運河の拡張、浚渫工事のため活躍している永野組の工事現場を通過したときであらう。

日本人三十二名、現地人約百五十名を雇っての大工事、この工事で長い人はもう二年以上も祖国を離れているとか。

その邦人最大の楽しみは、工事中三日に一度くらいの割合で通る日本商船に手を振ることとか。

「今度の練習艦隊の通過はずいぶん前から期待していました。た。

どんな艦が来るのか、他国の軍艦に比べて恥ずかしい艦は来ないだろうか。

取り越し苦労というか、内地で自衛隊という評判はあまり良くないのでと複雑な気持ちだったらしい。

それが小さいながら整然と整備され、力強い、スマートな「あきづき」以下の国産艦を見た感激、異境で見た軍艦旗のたのもしさ、日本の国力を現実に見たという感激、一生涯残るでしょうと話していた。

浚渫船の上は日焼した元気な顔、顔、顔、マストの上まで人で一杯、万国旗を飾り、日の丸、ハンカチを振る「頑張ってください、祖国のために」心からそういわずにはいらぬような感動が私を襲った。

のが残念です」と述懐していた。

それには妻子を日本から呼び寄せ、在外日本人の一番の悩みである子弟教育の問題を解決し、その国に根を下ろし、尊敬される市民にならなければならぬ。

今年で創立五十周年を迎える会員三千を数える泰園日本人会の最初の行事が、山田長政の作った日本人町跡に記念碑を立てることであり、日本人小学校設立であったという。

時の王朝に協力し、タイ人から信頼され、その国の発展と安全に尽した往時の日本人の活躍を、今ではその開発、近代化という型で再現しようとしている。

ここに他寄港地には見られなかった、今後の在外邦人のあり方、方向があると感じた。

確かに他国にはない、自動車組立工場、紡績工場、電球工場、機械組立、タイ味の素等大規模な日タイ協同の産業が発展途上にある。

トラックの一〇〇%バスの八〇%が日本製、ラジオから流れる日本の流行歌、軍艦マーチを歌って我々を迎える海軍兵学校生徒。

町にあふれる日本製品の広告、商品の山、強力な日本経済の進出、活発な発展があった。

バンコック入港時、手に手に日の丸とタイ国旗を持って我々を迎えた日本人小学校生徒の明るい元気な顔、この顔に今後の日タイ関係の明るさを感じた。

(四) ローマ、ボルゲーゼ公園の一角、ローマ大学、英考古学研究所、オーストリア文化会館等と並んで、外観は純日本風な寝殿造り、内部は桃山調の豪華な日本文化会館がある。しかしイタリアは英仏独等と比べ在留日本人の数も少なく淋しい感じがした。

(四) アデンは香港・シンガポールに次ぐ世界三大自由港。

外国の港ではどこでも見られるクロック・タワーの下の一本道を海岸沿いに進むと、タワヒ地区と呼ばれる商店街に出る。

外国品は豊富で又安い。世界一流の商品がところ狭しと並べてある。

しかし日本商品の多いには驚いた。カメラ、テーブルコーナー、テレビ、時計、などは軒並で、ソニー、ナショナル、サンヨーの看板を出した店が英米独伊の一流会社の商品と堂々張合っている。

玩具等一〇〇%日本製品といって過言ではない。

その玩具店をのぞくと「日本製品は大変良い。日本は我々の邦友である。ナセルをどう思う。彼は偉人だろう」と話しかける。

そして何も買わずに出ようとしたら

「日本とアラブは友達だろう、日本人が日本のものをどうして買わないのか」「ジャバン・フレンド」「ジャバン・フレンド」と後を追う。やっとのことで波止場へ逃げ帰る。

波止場はいま入港中の英米日の水兵であふれていた。
日本製のテープレコーダー、オートバイまで買い込むアメリカ兵。

トランジエスター、玩具程度のイギリス兵、一枚五シリングの絵ハガキ止まりの日本兵、自国の商品が売れる喜びと自分達は絵ハガキ程度しか買えない淋しさ、複雑な気持ちだった。小遣い百ドルと聞き、悪くはないですよと答えた在留邦人が十五寄港地、百三十日間と聞いて言葉がなかった。

田舎議員が多額の外貨を使い、我々士官はタクシーに乗る金もなく、制服でてくてく歩き「日本海軍は暑さに強い」とほめられた。

(六) 海外で日本人の居るところ必ず海兵七五期と名のる人がいて、同期の連中を見学だ、家庭招待だと誘い出し我々戦後派をうらやましがらせた。

神父、獣医、大学院研究生、商社員、自動車のセールスマンからインスタントラーメンのヨーロッパ輸出に情熱を傾け「ラーメンは売れます、絶対ヒットします」と語るセールスマン、七五期が現在我が国のあらゆる分野で活躍している。その縮図を我々は外国で見た。

(七) スエズ運河通行中大ビッター湖上で、これから地中海を通じてアフリカ沿岸へ活躍に行くらしい三〇〇トンくらいの日本漁船と会う。我々総員甲板に出て手を振る。漁船の方からも甲板・ブリッジの上から手を振り日の丸を

方も知らぬ。赤毛布のくせにどうも日本のインテリはこうだから困る。

又ロンドンで出会った日本人観光団のバスとすれ違い、窓から身を乗り出して手を振る我々のバスに申し訳のように二三人の人が手を振って答える。

彼らの常識、感情というものはいくら考えてもわからぬ。

三、遠航失敗五題

(一) 平間一尉外務大臣に名を売る

ポーツマス出港七日後、ナポリ入港を控えてその準備に忙殺されてる幕僚事務室へ電信員が一連の海幕発の電報を持って来た。

電文に曰く

「発 大平外務大臣 宛 海路長經由練習艦隊司令官

本文一在英大野大使からの連幕によれば、貴艦隊、横須賀市長からポーツマス市長宛に託送を依頼された児童画、二枚しか受領してない由連絡があったので状況至急調査の上、ご連絡願いたい」

艦内は大騒ぎ、司令官は烈火の如く怒り、私は事の重大さに「ハイッ」「ハ」「ハイッ」の連発。

電文にあるとおりポーツマスにて日英両児童画の交換式を実施すべく司令官公室に前日ポーツマス市長よりとどいたポーツマス市の児童画と横須賀市かの児童画を二つテーブル

振り、そして日本の流行歌（あかしやに雨が降るとき）をスビーカー一杯にアラブの空に響かせながら別れていった。

ところは英仏海峡、後方から軍艦マーチが聞えてくる。

見れば、甲板からブリッジ、マストまで、人、人、人、恐らく船内の日の丸を全部出したのであろう。

六と七本、大きいのは五米四方もあるのを振り、軍艦マーチを響かせながら静かに徐行し名残りを惜しみながら追い越して行った日本商船。

コロンボ・アデン・イスタンブル・バンコック、又洋上で数十隻の商船、漁船に会った。懐かしかった。

ここにも日本人がいる、日本のために活躍している人が居ると、我々を力づけ、激励してくれた。地中海で、大西洋でインド洋で。

この人達と比べ旅行者の態度、今までわからぬ。

パリで無名戦士の墓に花束を捧げた後、制服、制帽、帯刀の我々とロビーで出会った日本人、軽い気持ちで「やあ、今日は」と挨拶をしたが応答なし。メガネにカメラ、せせこましい歩き方、どう考えても日本人と見たが。

その夕方、セーヌ河を私服で散歩していた私に、その男「あの、ロワイヤル・モンソーホテルにはどう行くのでしょう。タクシーに手を上げるのですが全然止まらず困っています」と来やがった。

勝手なときだけ、日本人になりやがって、タクシーの乗り

の上に並べ、見本を二枚取出し、写真員を配置につけ「司令官、贈呈式準備完了しました」と報告、鼓門から公室へ市長教育委員長、秘書の三名を案内、従兵に「カルピス三杯」と命じて他の行事打合せのため幕僚事務室に下った。

しばらくして司令官室をのぞくときれいに片づけられている。秘書も居たし、贈呈されたものをまさか置いていくとも考えず、電報の来るまで気が付かなかった。

調べてみると、そのとき従兵共は両方とも横須賀市長宛の託送品と勘違いして、艦底の倉庫へかたづけしてしまった。

今となってはポーツマスに引き返さすわけにもゆかず、まあシンガポールまでにはどりにかなるだろうということになり。

アデンで英駆逐艦に頼み込み事なきを得た。

大平外務大臣の訪仏と我々の寄港が重なり、パリーの日本大使主催の外務大臣歓迎パーティで一緒になった。

司令官と大臣の会話を気付かれぬようにときどき見ながら立っている茶坊主に、大臣夫人が「これが副官師章ですか、これを付けている人の方が偉いみたい」と近づいて来た。

お名前はということから名刺を渡した。船の話になり、盲腸患者は船から船に綱渡しと、ハイラインの説明、「ハイ、ハイ」「マアマア」とか感心して聞いていたが大臣が気付き、「やあ、副官とは大変ですね、細々と気を使わなければならぬことも多いし、ご苦労さん」

奥さんの差出す名刺を手に取り「平間君か」と来た。

多分、大臣あの電報にサインをしながら、ああ、練習艦隊の綱渡しの男か、平間とかいってたなと思ひ出したことだらう。

(一) 実習幹部メシも喰わずに砂漠をさまようエジプトはアレキサンドリア。

エジプト海軍連絡士官アブドラ中佐、「本日実習幹部七十名に対しエジプト最大の紡績工場見学の招待があった。九時艦発十六時帰艦、バスはエジプト海軍、食事は会社が準備する」

「招待を受けますか」せっかくの申し出、実習幹部指導官の田畑に聞いたら「エジプト料理も悪くない、行こう」と喰い意地の張った実習員を集めた。二台のバスに分乗、勇んで出発。

昼食近くに目的の工場に到着、早速ジュースの接待。飲み終って見学開始、終って先程ジュースの出たところへ来たが何も出そうな気配なし。

「メシはどうした」とも聞けず、不満やるかたない実習幹部を引き連れ、空腹をかかえ炎天の砂漠の中を又三時間、敗残兵のような恰好で帰艦。帰艦したとてメシはなし堅パンをポリポリ、ブツブツ言いながらかじっていた。

いずれにせよ、こちらの下手な英語とアラブなまりの下手な英語による打合せ、無事に帰えられたのもって可とすべき

か。

田畑君、すまぬことをした、今度、メシでも喰いに来てくれ。

(二) 朝鮮海軍イスタンブルに入港？

これも言葉による間違い、ナポリでニラを積み込むつもりが、持って来たのはニンニク、返えずに返えせず積み込んだが、これは大使館側がニラをニンニクと訳し違えたことから生じた間違いらしい。

おかげでナポリ出港後の艦内はニンニクの臭気が充満、嗅い、朝鮮海軍か、捨てろ、他人の迷惑も考えろとの国粋派、生糧品が不足している、又灼熱の紅海を通る体力を養うべきだとの現実派に別かれて対立、しかし、出港後誰かが海に捨てたのか、日本海軍トルコに入港ということになった。

(四) 実習幹部パリ行き超特急を急停車

パリー見学は予算の関係で希望者のみ自費で行くことになった。約三十人の実習員に三期の伊木君が指導官としてツロン発の超特急、大陸横断列車に六人一組、五個室を占領、勇んで出発とあいなった。

さてしばらく行くとトンネル、車内の電灯がなかなかつく気配がない。

そこは恋の国、愛の国、各自自分の好きなよう適当にやってくれ。

「いくら待っても電気がつかぬと知ると、そこは、何んで

も見てやるう、してやれの実習幹部、早速壁のあたりのスイッチを手さぐりで入れた。こうこうと電灯がつき、非常ベルが鳴り列車が急停車、大声で「ボワラ」と車掌が来たのが殆んど同時だった。

何が何んだかわからぬが壁のスイッチを指さし、ペラペラやられて罰金を取られたそうだ。

スイッチに照明灯と非常停車ベルとの二つがあるのに気がついたのは数百円の罰金を払った後だった。

早速、伊木君このことを全員に知らせ席に帰えると又ベルが鳴る。

又かと頭をかかえたそうだが今度はアメリカの観光団とわかって一安心。

大体フランス語でしか説明が書いてない揭示、フランス国鉄職員の小遣いかせぎが目的としか思えぬと憤慨していた。

この事件、二六年前に練習艦隊が訪仏したときにも同じことがあったとか、帝国海軍の伝統を美事に受け継いだと喜ぶ伝統派と、二六年来儲け続けているのかと怒るエコノミー派に意見はわかれた。

(四) マラヤはベナン、司令官主催レセプション、招待された現地側は大使以下の日本人、マラヤ政府関係者、商工業代表の四十名、マラヤ人、中国人とも色がちょっと黒い以外、日本人と大差なし。

これを接待する実習員、ビールを大使に勧めながら「With

ere Were You born」聞かれた大使負けずに「I was born in Kyushu JAPAN」

実習員、飛び上がった驚いた。

大使どうも失礼致しました。以後気をつけさせます。

(練習艦隊司令部付 一期海上)